大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンの結婚物語：『物語』（1826/1827）について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006139

カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンの結婚物語
――『物語集』(1826/1827)について ――

星　野　純　子

1

カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲン(Karoline von Wolzogen 1763-1847)は、『アグネス・フォン・リーリエン』(1796-97)成功の後、短編集として二巻本の『物語集』(1826-27)をコッタ社から、長編小説『コルデーリア』(1840)をブロックハウス社から、いずれも「アグネス・フォン・リーリエンの著者による」として出版した。

本論文ではこの『物語集』の７編の短編をとりあげ、作家カロリーネの表現を分析、検討する。

この作品集には以下の７編の短編がおさめられている(初出年と頁数を示した)[1)]。

第１巻　(１)『しし鼻の少女』(1825/100頁)
　　(２)『自然の治癒』(1826/143頁)
　　(３)『ヴァルターとナンニー』(1801/194頁)
　　(４)『エドムントとエンマ』(1804/90頁)
第２巻　(５)『アンナ ―― 宗教改革時代の書簡物語』(1827/222頁)
　　(６)『誠実に勝るものなし』(1827/152頁)
　　(７)『ジプシーたち』(1802/95頁)

このうち、『アンナ』『誠実に勝るものなし』『自然の治癒』の３篇はこの作品集で初めて発表されたものである。『ヴァルターとナンニー』『エドムントとエンマ』『ジプシーたち』は1800-1804年にかけて既に『女性年鑑』(*Taschenbuch für Damen*)に掲載され、『ヴァルターとナンニー』は1801年と1802年にベルリンで海賊版がでている。『しし鼻の少女』は1825年５月から６月にかけて『教養ある人々のための朝刊』(*Morgenblatt für gebildete Stände*)に連載された。

まずそれぞれの物語のあらすじをごく簡単にまとめておく。

(１)『しし鼻の少女』

ライムントとクロチルデは互いを愛しているが、彼女の鼻はギリシャ風ではなく、団子鼻であるため、美しい内面は完全に美しい外面を備えているべきでだという理想を追求するライムントは彼女に求婚できない。クロチルデの友人ラウラは友の話を聞いて一計を案じ、ルーチエと名のり、ライムントを誘惑する振りをする。理想的な美女のラウラにライムントは最初は夢中になるが、やがて彼女を退屈だと思うようになる。彼女のわざとらしさや独占的要求と比べて、クロチルデの自然な純真さと広い心の価値をさとったライムントは彼女こそ「彼の心の

故郷」だと、彼女のもとへ帰り、二人は結ばれる。

（2）『自然の治癒』

ある湯治場で知り合った二人の男性アルトゥールとロタールが互いに自分の過去を語り合う。富裕な商人の息子アルトゥールは純真な少女ローザと知り合い恋におちる。アルトゥールはローザを愛しながらも、美しいが派手で軽薄な既婚女性エルヴィーレの魅力にもとらえられ、二人の女性の間を揺れ動く。ローザは彼の裏切りにショックをうけ、母と共にラインの向こうへ逃れる。彼女の別れの手紙を読んだアルトゥールは自分の非を悟り、彼女の跡を追うが行方を見失う。彼が知り得たのは、熱病で生死の境をさまよい、どうにか回復したローザはいずことも知れぬ修道院に身を投じたらしいということのみである。その後、相次いで両親を亡くしたアルトゥールは、父の商売を継ぎ、成功をおさめるが、心は荒涼として、愛も信頼も希望も拒まれた生活を送っている。

一方、士官学校に学ぶロタールは、寄宿舎の隣家の娘、清純なリーナに心を奪われる。彼女には婚約者があってロタールは彼女とは結ばれないが、彼女の思い出はいつまでも彼の心に生きつづけている。次に、華やかで社交的な既婚夫人、ベラと恋仲になり、恋敵と決闘したロタールは重傷を負ってボーデン湖畔に逃れ、修道院に身を寄せていたマリーという少女の世話をうけて療養する。ロタールはマリーに情熱を示すようになるが、彼女はそれを受け入れない。ひとり旅立ちながらも、ロタールの精神状態を心から心配した彼女は、共通の友人である牧師ゴットホルトにロタールのためには自分を犠牲にすべきではないだろうか、と相談する。その手紙を見せられたロタールはマリーのやさしさと献身に心をうたれて、「自分は癒された」と自覚し、彼女の申し出は断る。彼はその後、彼女の面影を心に抱きながら、孤独な旅を何年も続け、諦念への道を歩んでいるのである。

実はローザとマリーは同一人物で、二人の会話をここで偶然立ち聞きしてしまったリンデン夫人こそが、彼女だということが判明する。彼女の友人として登場したリーナ（彼女は少し前に夫を亡くしていた）とロタールは結ばれ、アルトゥールは「彼の全存在をローザの家族圏に捧げ、子供たちの運命を気遣い、教化し、子供たちは彼を第二の父として敬い、愛したのである」（243）

（3）『ヴァルターとナンニー』

スイスの美しい谷に隣り合って住む田舎貴族の子供ヴァルターとナンニーは愛し合い結婚を約束している。裕福な伯父ローベルトの世話でヴァルターは町にでて、軍務につく。純朴なナンニーへの憧れを胸にいだきながらも、彼はしかし、レオノーレという女性の魅力にとらえられる。一方、故郷では、伯父がナンニーを自分のものにしようとして、親切さを装ってフランス語その他の教育をほどこし、彼女を自分好みの女性に育てようとしている。やがてローベルトは最後の教育の仕上げにナンニーをレオノーレの友人のマダムHのもとに預けるべく、町に出る。世慣れた三人に翻弄されて、若い二人は互いの裏切りを信じてしまい、二人の誠実さは様々な試練にさらされる。終にローベルトの意図と誘惑者という正体に気づいたナンニーは

逃げ出し、倒れて、国境の修道院に保護され、意識不明に陥る。後を追うヴァルター、伯父と甥の決闘、ヴァルターの負傷、レオノーレの登場、伯父は後悔し、レオノーレは自分の軽率さを悔やみ、意識を取り戻した若い二人は結ばれる。「誠実さと信頼が奸計のあらゆる企みから二人を救ったのだった」。

（4）『エドムントとエンマ』

中年の教養ある紳士エドムントはＢ未亡人の娘エンマを愛しているが、なかなか言い出せない。エンマも彼を尊敬し信頼しているが、彼の態度がはっきりしないため、自分の本当の感情に気がつかず、若い士官ホーエンベルクと婚約する。ちょうどその頃、彼女は行き倒れになっていたスペインの少女ラファエラを助ける。彼女はピレネー駐屯中に恋仲になったドイツ士官に捨てられ、彼を追って旅して来ていたのだった。この士官がホーエンベルクであることがわかり、礼拝堂で祈っているラファエラに遭遇した彼は、エンマとの婚約を解消する。一方エドムントとエンマも互いの愛を自覚して告白し、二組の幸福な夫婦が出来あがったのだった。

（5）『アンナ ── 宗教改革時代の書簡物語』

シュヴァーベンの騎士の娘アンナが友人ベルタに宛てた手紙、若い宮内官オットマール・フォン・ラインフェルトが友人ヴァルター・フォン・シュトラーレンに宛てた手紙で物語りは構成される。ベルタとヴァルターは婚約者という設定である。アンナとオットマールは君主の結婚式で互いに知り合い、愛しあうようになるが、実はオットマールは母親の誓いによって聖職につくことが決まっていた。アンナは諦念の決心をして故郷を離れ、修道院に入ろうとするが、旅の途中で偶然、オットマールの僧職授与式を目撃する。その頃南ドイツに広がった農民の蜂起とシュヴァーベン同盟軍との闘いに二人の運命は巻き込まれていく。このシュヴァーベン同盟でオットマールは騎士団所属の騎士としてアンナの父の側で闘っていたのだが、そのうちに主人公たちはみな、ルターの思考世界に近づき、オットマールがその宗教上の誓約から解放されたために、恋人たちの結婚が可能になったのだった。

（6）『誠実に勝るものなし』

大きな暗い森、どこかの侯国、パラダイスのような孤島を舞台とするメールヒェンであり、騎士物語である。「暗い森の騎士」アストルフは君主の信望を得て彼に仕えている。実は彼は君主の兄の息子なのだが、邪悪な侯妃リーリア（彼女はオリエント出身で魔術を巧みに操る）が昔、殺させようとしたのを哀れに思った人が森の隠者に託し、自分の素性を知らずに育ったのである。いつまでも若く美しいリーリアはアストルフに惚れ込み何とかして彼を我が物にしようとしている。

一方、シュヴァーベンの山の城砦に住む、貴族の孤児、リーベガルトは便宜結婚を強いられるが、不思議な夢のお告げでそれを逃れ、騎士アストルフと結ばれる。リーリアの力を恐れるアストルフは彼女を小さな島に匿う。

夫の死後、アストルフへの求婚を拒絶されたリーリアはある夜、魔法を使ってこの島を訪

れる。アストルフの命を救うために、リーベガルトを脅して修道院にいれ、アストルフには彼女は死んだと思わせることを誓わせる。

リーリアとアストルフの婚礼の行列で、彼の二匹の犬が突然、群集の中の巡礼女にとびつく。彼女は死んだと思われていたリーベガルトだった。逆上したリーリアは毒を塗った刃でアストルフを刺すが、このとき、森の隠者が現れて彼を生きかえらせる。アストルフとリーベガルトは結ばれ、悔い改めたリーリアは修道院に入る。

（7）『ジプシーたち』

若い貴族の娘アロイージアは意に添わぬ結婚を迫られるが、婚礼の旅の途上でジプシーに襲われ、誘拐される。「次の瞬間のことしか考えない軽い子供のような民」の中にあっても、何か異質なものをもった、首領の息子ロドリーゴとアロイージアは互いに惹かれていく。実はこの首領はイタリア人で、ロドリーゴは彼とあるドイツ侯爵夫人との間に生まれた子供だった。侯爵夫人は恥辱を避けるために、不本意な結婚をして息子を育てていたのだが、後に彼を父親がさらってジプシーの群れに身をよせたのだった。母親は息子が溺れ死んだと思っていたのだが、占い女を装って現れたアロイージアの活躍ですべてが明らかになり、父親も「文明世界」に戻り、若い二人は結ばれる。

2

こうしてあらすじを整理してみると、様々なモティーフを組み合わせ、ヴァリエーションを施し、いろんな味付けをしてあるが、物語の骨格は同一であることがわかる。男女のカップルが障害を乗り越えて最終的には幸福な結婚に至るというもので、変わらぬ愛、二人の貞節に基づく調和的な愛を称えるものである。

その障害は外的障害の場合と内的障害の場合がある。『アンナ』では宗教問題、『誠実に勝るものなし』では邪悪な侯妃の横恋慕、『ジプシーたち』では文明社会からの離脱という、主人公たちの置かれた外的状況の制約や第三者の介入がその障害である場合には、二人の愛情は終始揺るがず、貞節さは貫徹され、結婚という制度で完成することになり、歴史上の過去や架空の国、文明化されない流浪の民の群れを舞台としたおとぎばなしのような物語ができあがる。

それに対して障害が主人公たちの内面にある場合、間違った順列組み合わせが最終的には正しい組み合わせに到達するという展開になり、男女の心理が分析されることになる。そのうち、『しし鼻の少女』では男性が、『エドムントとエンマ』では女性が一時的に自分の気持ちを見誤るが、結局は全員が正しい組み合わせで結婚という秩序に落ちつく。

残りの二作ではもう少し人物造形も人物相互の関係も複雑になっている。『自然の治癒』では最終的にはヒロインは便宜結婚をするし、『ヴァルターとナンニー』では敵役の男女は古典主義的な明澄な世界に収まらない人物として造形されるなど、どちらも物語の基礎となる構造や秩序が幾分危うくなっているのではないかと思われる節がある。

さてしかし、このようなハッピーエンドに終わる恋愛物語というのは、現代のソープドラ

マやハーレークイーン小説に至るまで女性向の読み物の伝統である。そもそも18世紀末に女性が小説の読者として登場し始めたときにも、彼女たちが求めたのは愛をテーマとする小説であり、「主人公がただの一度も恋をしない」ような小説を彼女たちは「不機嫌に後悔しながら投げ出」したのである[2)]。また、偶然に支配された非現実的な筋の展開や感情過多の心情表現などは昔も今も通俗的な文学に共通するものだろう。カロリーネの作品が掲載された『女性年鑑』のテーマやスタイルも同様であり、このような通俗性は彼女自身が子供のころから慣れ親しんできた読書世界でもあった。

カロリーネの場合にはこれに後に彼女が幅広い古典の読書やシラーとの交流などで身につけたワイマール古典文化の美学的道徳的規範が付け加わる。ゲーテ、シラーの著作は彼女の日々の愛読書であり、行動の指針ともなっていた。そこで、ヒロインたちは『トゥーレの王』を歌い、『エグモント』を観劇し、『ヴァレンシュタイン』を朗読し、背景では『ヴィルヘルム・マイスター』や『優美さと威厳』がパラフレーズされ、『親和力』の諦念や『鐘のうた』の理念が反響している。

しかしありきたりの通俗性や高踏的趣味をこえて、彼女の作品に現実性を与えているのは物語に織り込まれた自伝的な要素だろう。彼女の経験した、強いられた不幸な結婚、母や妹のために犠牲としてなされたボイルヴィッツとの便宜結婚(Konvenienzehe)がいかに彼女のトラウマになっていたかは、カロリーネが幾度も幾度も、間違った結婚、強制された結婚が危機一髪というところで成立しなくなるというモティーフを使わずにはおれなかったことからもわかる。『ヴァルターとナンニー』のヴァルター、『誠実に勝るものなし』のアストルフはともに間違った相手(レオノーレ、リーリア)との婚礼を挙げそうになるところを、あわやというところで阻止される。

また、『ジプシーたち』では、強いられた便宜結婚をヒロインが逃れるところから物語が始まり、花婿に付き添われて婚礼に向かうシーンはとりわけ念入りに描かれる。

> 叔母はアロイージアが彼女の運命を全うするかどうか、心配そうに待ち焦がれて、しかしわざとらしい明るさで、彼女の隣に座っていた。古い飾り立てられた馬車はまるでガラスでできたようだった。アロイージアは彼女の頑丈な花婿の姿がいつも自分の脇にいるのを見た。彼は立派な覆いで飾られた素晴らしい馬に乗り、祖先の一人がトルコ人から奪った、ダイアモンドの握りのついたサーベルをさげていた。円い火のように赤い彼の顔は幾度も微笑みながら馬車の方に向けられた。彼の誇りは彼女自身より花嫁を取り巻いている壮麗さを楽しんでいるようだった。彼の小さな輝く眼はたいていは車の前の壮麗な馬に向けら、彼女を見るのは稀だった。時々彼は拙劣な冗談でいっぱいの話し掛けをあえてやり、嫌悪感のために哀れな花嫁の青白い頬にさっと赤みがさすのをにやにや笑いながら、それを乙女らしい恥じらいの表情と取るのだった。アロイージアにはこの婚礼の華やかな色合いも、まるで黒い葬列のように思えるのだった。自然のあらゆる輝きも光も彼女にとっては消えてしまった。彼女は自分を憎い人の所有物と見ないわけにはいかなかったからである。(7-396)

メールヒェン仕立ての『誠実に勝るものなし』でも、前史として、便宜結婚を強いられるヒ

ロインの状況や心理が不必要なほどに長々と取り上げられる。

さらに作者は物語を悲劇で終わらせることができず、この童話も、アストルフが死んだと思っていた妻と再会したとき、嫉妬に駆られた侯妃リ―リアが振るった刃は毒が塗ってあったために、彼は即死状態になったのを、リーベガルトが「彼の妻である私こそがこの勤めを果たすにふさわしい」(6-368)と、自分の死も恐れず毒を吸い取って彼を蘇生させ、その彼女を隠者が秘薬で生きかえらせるという具合に、滑稽なほどのご都合主義のハッピーエンドになる。

作者の妹のシャルロッテ・シラーは子供のころの思い出として、姉とその頃同居していた従姉アマーリエが好んだ「お芝居ごっこ」のことを伝えている。「お天気が悪いと私は隅っこに座ってカロリーネとアマーリエが小説の会話を演じるのを聞きました。一人がいつも作品のヒロインで、出来事を物語る代わりにドラマとして演じるのです。これはとても面白いものでした。…小説やドラマがすべてそうであるように、これもいつも結婚で終わったのです。」[3]この子供のときの「お芝居ごっこ」とは対照的に、作者の実人生でははじめに不幸な結婚があったのだが、創作では彼女は話を、便宜結婚からの逃走で始める。逃走はしかもヒロイン自身の果敢な行動によってではなく、最後の瞬間に救出者が現れることで実現され、ヒロインは僥倖に恵まれて無垢の状態に戻り、幸福な結婚への道へと歩み出すことが可能になりのである。つまり、物語を紡ぎ出すときにカロリーネが願ったのは、自分の実体験に何らかの意味ある解釈をほどこすことではなく、自分の誤った人生を振り出しに戻し、人生を書き変えることなのである。

自己救出の願望の強さは、逃走というモティーフへのこだわり、ぎりぎりのところまでヒロインを追い詰め、最後の瞬間に救い手を出現させるというドラマティックな手法、ヒロインは最後には無垢なまま正しい相手の胸に届けられるという構造などにも読み取ることができるだろう。これを夢物語として語るときには多少の強引さはあっても、全体として話はうまくまとめられる。例えばカロリーネについての詳細な伝記を書いたカーン＝ヴァラーシュタインは過去の時代の趣味に合わせた彼女の作品は我々にはもはや読むに耐えないとして、作品の内容は正面から取り上げないのに、『誠実に勝るものなし』だけはメールヘェンとして評価しているほどである[4]。

また、『エドムントとエンマ』は、おとぎ話ではないけれどヒロインの感情の錯誤はあくまで一時的なものなので、冒険物語の要素をうまく投入して、基本的には男も女も貞節を貫くというお話としてまとまっている。

3

しかし、男女の心理を掘り下げ分析してその上で結婚物語を組み立てようとすると、カロリーネは苦境に陥る。彼女の創作の動機は、上述のように自己救出にあったため、心身症に陥るほどの痛ましい彼女の人生経験(およびそこから得られる洞察)はいわば無視されることになってしまい、人物描写は類型化されるか、あるいは叙述はどこかで飛躍が生じ、何かがはっきりしないままに物語が上滑りしてしまう。

『しし鼻の少女』を見てみよう。美女のルーチエに魅惑されたライムントはやがて、彼女には「心の奥底から出てきてあらゆるものに永遠の新しさという魔力を与えるゲーニウスの天上的な命が欠けている」(1-70)と感じるようになる。しかしルーチエにクロチルデの存在を咎められると、「私には女友達がいます。きわめて愛らしい機知に富んだ少女たちの一人です。でもあなたに対する私の愛と憧憬はそれがために真実でないということはないのです」(1-75)と断言して、ルーチエにこう言い返される。「もしあなたが…私との永続的な結びつきを望んでおられるのなら、私の感じ方を知っておいてもらわねばなりません。他の女性との親しい関係は、社交的以上のものであれば私には様々な不幸の原因となるでしょう。すべてか無かを私の心は要求しているのです。私のために女友達をあきらめられないような人は、私への要求はすべてあきらめた方がよいでしょう」(1-75)。こう明言されてやっとライムントはクロチルデへの友情を捨てることをはっきり拒否するわけだが、この場面を作者はこう描写する。「彼の別れの挨拶には少し不機嫌な調子が見られ、それを美女のどんな魅惑的輝きも和らげることはできなかった。彼はルーチエにもう一度燃えるような視線を投げかけて部屋をあとにした。」(1-76)。こうして彼は「君は愛と忍耐とあらゆる高貴な感情においてなんと豊かなんだろう。君は私の心を天の露で生気づけてくれるのに、あの(ルーチエの)愛は私の心を地獄の硬直したエゴイズムへと乾涸びさせることしかできないのだ。」(1-77)と考え、クロチルデのもとに戻り求婚するのである。

この部分は現代の読者ならこう解釈するしかないだろう。美女から男女の二重規範拒否を面と向かって宣言され、自尊心を傷つけられた男性が美女に未練を感じながらも、ひたすら自分に純愛を捧げてくれる家庭的な少女のもとに帰っていくのだと。だが、作者はいささかのイロニーもまじえずに、ライムントに臆面もなく「すべてが、すべてが君にはある」(1-93)とクロチルデに向かって告白させるのである。クロチルデもライムントも時代規範にあった男女イメージの枠を出ないため、彼らは真に向かいあうことはなく、せっかくのルーチエの挑発にもかかわらず、恋人同士は心理的緊張感に欠けたまま、結婚という結末に滑り込んでいくのである。

これは『自然の治癒』においても同じである。ここでは二人の男性は様々なタイプの女性に惹かれるのだが、ヒロインのマリーは「到達できないものだけが男たちを刺激する」(2-210)のだと、女とは異なった男の在りかたを容認する。シラー、フンボルト等によって構築された女性性／男性性の理念をそのまま繰り返し、男性の投影像である女性イメージを女性の口からも確認してみせるのである。

アルトゥールの裏切りに絶望し、「二度と情熱を芽生えさせまい」(2-219)と決心したローザ(マリー)は、ロタールに向かって、「地上の幸福ではなく、永遠性に結びつく、有益にすごした日々の静けさと平安を追求すべきだということが今や私にはわかったのです」(2-208)と答え、彼の愛を受け入れず、聖女のような生き方を選ぼうとする。ところがその後、牧師ゴットホルトに次のような手紙を書くのである。

「あの若い方の状態に私は非常な不安をおぼえます。この破壊的な情熱にきっかけを与えたのは私ではないだろうか、彼に対する私の配慮、心からの親切が、彼を惑わすような

色合いを帯びたのではないだろうかと、自問するのです。私の心は自由だと感じていますが、彼の憧れと彼の悲しみはひそかな非難のように私の心に重くのしかかります。すべて苦しむひとを助けるようにと、私の本性は私に教えています。[…]私は自分を犠牲にすべきなのでしょうか。彼の願望へ私が身を捧げてもそこからはいかなる幸福の花も、私にとっては咲き出ることはあり得ないでしょう。でも彼にとってはどうなのでしょう。私にとってですって？それは問題になりません。すべての地上的望みは私の胸では黙しているのですから。彼にとっては？ ── 彼は愛しながらも私の傍らではいつも孤独で不満を感じることになるのでしょうか。いかなる平安も我々の周りには吹くことが出来ないのでしょうか。彼のために私は自分を犠牲にすべきなのか、どうぞあなたが決めて下さい。」(2-220-221)

そしてこの申し出をロタールが拒絶すると、すぐに彼女はある寡男とまったく普通の便宜結婚に入り、こう総括する。「自然が私を癒してくれました。他のひとの幸福のために身を捧げようと考えることで、私は自分自身の幸福を見つけたのです。静かで献身的な尊敬で私はリンデン氏の妻となり、希望に満ちた男の子ふたりの世話に没頭したのです。」(2-231)

恐らくマリーのこの自己犠牲と献身は作者がボイルヴィッツとの結婚を受け入れ、シラーへの愛をあきらめ、耐える生活を送る中で自分を納得させるために考えた自己正当化の論理でもあっただろう。これを彼女は激しい情念を浄化した清澄な境地という古典主義の理想と結びつけ、そこで場所を得て生きる女性像を作り出す。しかしヒロインのその時々の決断は、読む者を納得させるほどの内的必然性としては描かれない。ロタールの情熱は拒否しながら、マゾヒズムともいえるような自己犠牲を申し入れるのはなぜなのか、ロタールとリンデン氏の相違は何なのか、リンデン氏の場合は情熱恋愛でないから便宜結婚を受け入れるのか。読む者は何か説明が抜けているようなもどかしさを感じてしまう。情熱恋愛の拒否、他者の幸福だけを願う自己犠牲の精神、便宜結婚で得られる平安がまるで三題噺のように強引に結びつけられるが、作者にとっての問題はもう少し別のところにあって、他の説明やちがう解釈もあり得、異なった分析が必要なのにそれを避けているのではないか、という苛立ちを読む者はおぼえてしまう。

例えば別のところ、晩年の回想では彼女はこう書く。「…第二の世界、想像の世界が早くから私を捕らえ、卑俗な現実を遮蔽してくれました。偉大さを愛することが私の幸福でした。われわれの魂がその翼をそこに広げたいと思う、甘美な畏懼を私は早くから感じていました。一つの思想のために、一つの愛のために一身を捧げること、イデーにおいて人間性のすべてをわがものとすることを、私は早くから偉大さと呼んでいたのです。…」[5]マリーの自己犠牲の申し出や他者のために便宜結婚を受け入れるのは、偉大さを求めるカロリーネが、偉大なヒロイズムの可能性をそこに見出したということなのだろうか。しかし作者自身はこのような生き方から身をもぎ離したということを我々は既に知っているのだから、全体の構造としては実際の自分が排除されてしまうような世界を彼女は理想として語ることになるのである。そして彼女は自分が内的に経験したことは「卑俗な現実」として語ろうとしないのだから、ヒロインの内面を納得のいくようには説明できないのは当然かもしれない。

いずれにせよ同時代の現実を生きる男女の内面に沿っていくと、うつろわぬ愛によって結ばれた幸福な結婚という理念は崩壊し、御伽噺のような結婚物語は成立しなくなるのである。

4

さて古典的本質に満たされた調和的生を生きることを願ったカロリーネであるが、実は彼女にとっても生はもはや自明で明確なものではなかった。それが強く出ているのが『ヴァルターとナンニー』であり、この『物語集』の中で最も問題をはらんだ作品である。単純で素朴な主人公たちに対して、敵役のローベルトとレオノーレはロマン主義的な複雑で個性的な興味深い人格である。

エゴイスト、ローベルトの性格は次のように描かれる。

> ローベルトは大きな力と素質をもった人物であるが、自然により、或いは偏った教育のために内的平衡の感覚に欠けていた。愛と信頼を持たず、彼の生は果てしない上り下り、牽引と拒絶であった。今日は彼の燃えるような空想が天上的な美しさをあたえた対象を、明日は彼の洞察力が裸にしてしまった。かきたてられた欲望の熱狂状態を彼は愛と呼んだ。享楽や、または戻ってきた醒めた精神が、消えた欲望の対象すべてを空ろな灰の塊に変えてしまうので、生は幻滅が繰り返された後、終に恐ろしい荒野として彼の精神の前に横たわる。彼はただ、自分の強い燃えるような想像力の生み出した姿と共に生き、それを哲学体系として、自由な普遍的な見解の果実として、内的形成の花として驚き、敬うのだった。(3-283)

彼はナンニーを教育し、自分の世界に引きいれ、彼女の道義性が緩み、貞淑さが揺らぐことを望んでいるが、単なる誘惑者ではなく、新しい世界観の体現者なのである。

一方、ヴァルターも世慣れたレオノーレの魅力と策略とによって篭絡されそうになる。彼女も単なる悪女ではなく、実はローベルトのかつての恋人として、彼に教育されてそのロマン主義的哲学と世界観を身につけた女性で、いわばナンニーの教育が成功した場合、その未来の姿なのである。

しかしレオノーレはローベルトにこう手紙で訴える。

> なぜ我々の虚栄心は永遠なる変転の中にあって一貫性を望むのでしょうか。流れはその岸を変え、山は形を変えるのに、なぜ我々はあらゆる元素の変化きわまりないたわむれから不変性を要求するのでしょうか。私が憎むのは、晴れやかな喜びや享楽の瞬間を石化したメドゥサに造りかえるような、あらゆる種類の要求を生み出す関係にほかなりません。このような生きかたで幸せでいられるかどうかはまた別の問題です。しかし誰がいつも幸福だというのでしょう。——私は胸の中に言い表せない空虚さを感じていることは自分でも否定できません。もしなんらかの不断の関心が解けた糸を縒り合わさないならば、生は無内容にならざるを得ないと私には思えるのです。欲望は無理やり我々を結果へ追いやりますが、それ以外に何がそこからでてくるでしょうか。ローベルト、あなたが私の存在を、いかなる枠にも従わない自由へと教育して下さったことを私は感謝

すべきなのでしょうか。私はそれをほんとうに自由と呼ぶのでしょうか。それはひょっとしたら、よりどころのなさと呼ぶべきではないでしょうか。ある関係(優美の女神たちはそれを避けるのですが)の中で、半ば誠実でいるためだけでも、私の周りの人々がどんなに苦しみ、欺かれ、失望するかを見ると、友よ、私は感謝の念をもってあなたのことを思うのです。しかし、どこかで真実と誠実さとの生きた姿が見られるとしたら、良き夫によって愛され、はつらつとした子供たちに囲まれた健気な女性こそそれだと私は思うのです。彼女が小さな世界内の作用する愛であり慈悲深い神である様子こそが。そのときには、ローベルト、あなたは悪しき天使として私の前にいるのです。私に不信仰を伝えて、この無垢の楽園への道を閉ざしてしまった堕天使として。 ── ああ、何かあるうつろわぬ愛がほしいという深い欲望が、輝かしい姿をした天国の黄金色の雲をも自分の次元にまで引きずりおろしてしまうのです。 ── それは姿を消します。 ── しかし、それを泣き悲しむこと自身が生の甘美な幸福ではないでしょうか。(3-373)

ここで提出されているのは近代的自我の問題性であり、古典的で完結的した世界観や人間観にもはや安住できず、それを喪失と意識するロマン主義的世界理解である。ナウマンはそれを的確に「ここでテーマとなっているのは、反省、省察という堕罪である。単純で分かたれない意識の楽園から自由という混沌の世界へ、不安定へと追いやられた自立的自我の分裂した意識である」と述べている[6)]。

だとすると、トワイヨンも言うように、ここで追求すべきなのは「筋の核をなす愛の縺れではなく、それと結びついた感情と思考」[7)]である。実際、ナンニーもヴァルターもそれぞれの誘惑者に対して単なる誘惑以上のものを感じ、二人の体現する広い世界を垣間見てからは、これまでの彼らの狭いつつましい世界を批判的に眺めてしまうといった具合に、いわばアイデンティティーの揺らぎを覚えはじめていたのである。

しかし作者は結局は物語をどたばた劇に終わる主人公たちの救出劇としてしまい、瀕死の重病に陥るヒロイン、修道院への保護、決闘、和解、改悛といった冒険小説につきもののモティーフを積み重ねて、おきまりの幸福な結婚に落ちつかせてしまう。

5

さて、この『物語集』では、カロリーネは男女の貞節に基づいた調和的な愛および結婚という理念を守るために、物語を御伽噺の次元に止めたり、男女の心理についての説明をはぐらかしたり、便宜結婚を肯定する諦念物語に仕上げてきた。

しかし根本的には対の関係そのものが彼女にとっては非常に不安定なものと意識されていたとも言えるのではないだろうか。

この点に関してナウマンの解釈を聞いてみよう。ナウマンはカロリーネの人生にも作品にも頻繁に現れる「三角関係」に注目して、その意味を特に『アグネス・フォン・リーリエン』の結末部分についてこう解説している。「三角形はカロリーネの作品ではもつれた地上的有限性、歴史、物語の基礎形象である。三角形はしかしまた彼女の物語にとって調和の記号でもあ

る。家族と社会の基礎形象としてそれはすべてのペア関係の目標であり、家族や友情の環への拡大を保証する。カロリーネはエロス的三角形を解いて二者関係に持っていき、そののち再び三角形へと補う」[8)]。

この対幻想の危うさが前章でとりあげたロマンティックな世界理解と一緒になって、彼女が築く物語の構造を掘り崩しそうになっているのだともいえるだろう。

カロリーネはここで取り上げた完成作品以外にも、ロマン、短編、ドラマなどの構想やスケッチを数多く遺稿として残していて、マールバッハのシラー文庫に保存されている。そこには自分の読書体験や人生体験から着想した物語の構想がノートに書きとめられているのだが、それらはみなこの『物語集』と同工異曲の筋立てをもっていて、さらに短編のプランに偽装したボイルヴィッツとの離婚、ヴォルツォーゲンとの再婚、アドラースクロンとの関係を暗示する記述などもあるという[9)]。

このようにおびただしい物語を構想し、書きながら、だが彼女は現実の自分について、自分の敢行した反抗の数々については一切語らず、自分を消してしまおうとしたのである。自分の身にひきうけた諦念すらも書くことはなく、シラーの伝記においても「シラー夫妻の高貴な姿を輝かしい色彩で描くことで、自分は夫婦の栄光の背後に身を隠してしまった」のだった[10)]。

テキスト：

Erzählungen von der Verfasserin der Agnes von Lilien. Stuttgart und Tübingen, in der Cotta'schen Buchhandlung, 1826/27

(Caroline von Wolzogen, *Erzählungen* 2 Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim, Zürich, New York, 1998を使用。)

註

1）以下、テキストからの引用はここにあげた作品番号と頁数を括弧内に記した。

2）Erich Schön: *Weibliches Lesen, Romanleserinnen im späten 18. Jahrhundert.* In: Hrsg.von Helga Gallas und Magdalene Heuser, *Untersuchungen zum Roman von Frauen um 1800.* Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1990. S.28.

3）Zitiert nach Ursula Naumann: *<Das geistige Leben steht mir hell vor der Seele> Caroline von Wolzogen und Charlotte von Schiller* In:*Deutsche Schwestern*, hrsg. von Katharina Raabe, Rowohlt, 1998. S.46.

4）Carmen Kahn-Wallerstein: *Die Frau im Schatten, Schillers Schwägerin Karoline von Wolzogen* Francke Verlag, Bern und München, 1970.

5）*Literarische Nachlaß der Frau Caroline von Wolzogen*, Leipzig, 1848.
(Caroline von Wolzogen: *Literarische Nachlaß*, 2 Bände in einem Band, Georg Olms Verlag, Hildesheim, Zürich, New York, 1990. S.110.

6）Ursula Naumann: *Carolines Dreieckgeschichten* In: *Caroline von Wolzogen 1763-*

1847, hrsg. von Jochen Golz, Deutsche Schillergesellschaft, 1998. S.23.

7) Christiane Touaillon: *Der deutsche Frauenroman des 18.Jahrhunderts.* Faks. Dr. d.Ausg. D.Braunmüller Verl. Wien, Leipzig, 1919. Bern, Frankfurt a.M., Las Vegas, 1979.

8) Ursula Naumann: *Carolines Dreieckgeschichten* In: *Caroline von Wolzogen 1763-1847*, hrsg. von Jochen Golz, Deutsche Schillergesellschaft, 1998.

9) Norbert Oellers: *Der literarische Nachlaß Caroline von Wolzogens.* In: *Caroline von Wolzogen 1763-1847*, hrsg. von Jochen Golz, Deutsche Schillergesellschaft, 1998. S.126ff.

10) Christa Bürger: *Leben Schreiben Die Klassik, die Romantik und der Ort der Frauen.* Ulrike Helmer Verlag, 2001. S.35.